

2012年度 卒業論文

「ヨーロッパ人の思想の根底に流れ続けている  
古代ギリシア思想とは一体何なのか。」

環境情報学部4年 中野真也

学籍簿番号70846995

## 目次

### 第1章 はじめに

1-1 研究の背景 3ページ

1-2 研究の目的 3ページ

1-3 研究の仮説 3ページ

### 第2章 本論

2-1 古代ギリシア思想～プラトン、アリストテレス分析～ 4ページ

2-2 中世～キリスト教とスコラ学～ 6ページ

2-3 近代～ホッブズ、ロック、ルソーにみる古代ギリシア思想～ 6ページ

### 第3章 考察

3-1 ヨーロッパ人は常に「逃走」する 12ページ

3-2 思想家は常に古代ギリシア思想家と「闘争」する 13ページ

3-3 現代ヨーロッパの諸問題を解決する糸口としての「逃走×闘争」 13ページ

3-4 おわりに 13ページ

### 謝辞

### 参考文献

## 第1章 はじめに

### 1-1 研究の背景

これまでの研究会で学んできたあらゆるギリシア古代思想が、どうしても重大なものとして扱われ、歴史上においてもあらゆる思想家がその文献を手に取り、新たな持論を展開していき社会に影響を与えてきたのかということについて絶えず疑問を感じずにはいられなかった。それだけではなく、現代に目を向ければ、情報革命により、あらゆる思考、思想が氾濫し、支持を得る主張など一瞬で変わりうる環境の中においても、我々は未だに彼らの主張に触れる機会を持ち、それは言葉では表せない特別な「なにか」として神格化されているとさえ感じている。どうしてこれほどまでに長い間、とりわけヨーロッパ人の思想の中に彼らは生き続けているのだろうか。この論文をもってその答えを見出していきたい。

### 1-2 研究の目的

古代ギリシアの代表的思想家ソクラテス、プラトン、アリストテレスの思想を理解し、現代にいたる最大のターニングポイントであった近代の思想家への影響を分析し、そこから導き出される古代思想の影響を読み説き、最終的に現代にいたる流れの中にそれがなぜ定着していったか考えていく。その結果、それぞれの時代の人々にとって彼らがどういった存在であったかを解き明かすことで、ヨーロッパがたどってきた思想的な歴史がいかなるものであったかをみることができ、その延長線上にあるヨーロッパの「いま」も新たな視点で理解できるといえる。

### 1-3 研究の仮説

古代ギリシアの思想家は当時としては高レベルに完成された思想家であったといえ、その偉業に対する尊敬の念から、ヨーロッパにおいて神格化されていると考えられる。神格化されているとはいえ、各時代の人間にとってそれは越えなければならない壁であり、持論を持って、彼らと比較し、より優れたものを生みださなければならないという基準になっていたのではないかと考えられる。しかし、この仮説では、各時代の人間が越えることで、彼らの思想は意味を失い、いまに至るまで存在するようなものにはなりえなかつただろうといえる。この自己矛盾を研究により、解決し、よりよい結論を目指す。

## 第2章 本論

## 2-1 古代ギリシア思想～プラトン、アリストテレス分析～

プラトン、アリストテレスにおいて、核論においては当然それぞれ異なるものの、それぞれが主たる問題として扱うことはそう変わらない。「人間」「社会」「国家」である。これ以外にも触れている問題はあるが、現代の我々に至るまでのエッセンスを読み解くにあたり、現代でも大きな論議を呼ぶこの三つにフォーカスして彼らの思想を分析していくことにする。

まずはプラトンの思想についてまとめていこう。理解を深めるために、彼の思想のキーワードをいくつか挙げてみる。

### 『イデア論』

真に実在するものはイデアであり、人間が肉体的に感覚する世界は似像にすぎない。

### 『哲人政治』

民主政は結果的に衆愚政になる。その結果、独裁制が理想とされるが、その為政者は善政を必ずしも行わない。であるからして、その強大な権力にふさわしいのは徳を備えた哲学者である。

### 『正義論』

個人と国家の調和がなされた状態。それぞれが生まれながらに与えられた職分を全うし、その個人の集合体としてよい国家を形成しなければならない。

プラトンは「人間」のあるべき姿を正義論において規定し、それぞれがそれぞれの役割を全うすることを正義とし、その結果、として形成される「国家」とは同義のものであるという全体主義的な思想を展開し「人間」の「国家」におけるあるべき姿を規定した。また、「国家」運営において、当時とは思えないほど緻密な思想を哲人政治の部分を通じて展開している。民主政の危険性への指摘などは現代においても学ぶ部分が非常に多いものであるといえる子ではないだろうか。彼はその著書『国家』においてこれらの思想を展開したわけだが、その著書の文字通り、より良い「国家」というものを形成するために何をしなければいけないのかという点について非常に多くのヒントを残していると考えられる。いかに時代を経ようとも、彼の主張は斬新さを持ち、度々立ち返っては、その時代の問題を解決する鍵を探すべきものであるといえる。これは現代においても当然しなければいけない作業であろう。

次はアリストテレスの思想を見ていく。彼もプラトン同様代表的なキーワードをまとめた。

### 『中庸』

『形而上学』イデア論否定、存在を存在として考える。本質をみる。

『人間はポリスの動物である』

### 『習慣付け』

最後に彼らが「人間」「国家」「社会」について論じた代表的フレーズについてそれぞれまとめてみた。

#### 1. 「人間」の概念

- ポリスが市民のために存在するのではなく、市民がポリスのために存在する。
- 自分たちと”東の方の人間”は根本的に異なっている。
- 人間において不滅なのは魂のみである。財産、名声、命、そういったものは人間にとって大切ではなく、大切なものは魂に心配りすることである。

- 基本的人権は存在しなかった。奴隷制度が存在していたし、どんなに自由といっても、それは究極的にはポリスのために働く自由であった。
- 経済活動は家庭のなかで行うものであり、公的な活動ではなかった。
- 多くの人間は自分の中にある神聖な要素を埋没させたまま埋もれている。  
→自分の力を究極的に信じている
- 民衆というのは結局野獣のようなもので、結局リーダーは必ずそれに迎合する。
- 政治活動は人々を真理へと導いていくものでなければならない。
- ただ「生きる」のではなく「よく生きる」ことが重要。
- 人間は生物的な魂、欲望的な魂、理性的な魂の3要素によって成り立つ。そして、人間はポリスの中で初めて人間としての卓越性や徳を身につけることができる。(アリストテレス)

## 2. 「国家」の概念

- 国家は分業の上に成り立つ。ポリスの方が個人より優位である。
- 国家を擬人的に捉え、人間と同様に内在する観念のバランスが重要だとする。知恵、気概、欲望。
- 都市国家間や蛮族との間に起こる戦争は自然の秩序の一部である。
- 墮落した社会は哲人王によって支配されるべきである。権力と哲学の融合。
- 医術と同様に、政治も専門的な技術が必要である。
- 理想のポリスは三層構造をとる。これら3者は同胞であり、互いに助け合う。
- 理想な社会は人間が相互かつ平等に支配するものである。
- 国政は6つに分類される。

## 3. 「社会」の概念

- ノモスによって個々人の関係は規律化され、ルール化されていることが、自由の自由たる所以である。だから、権力を握っている人間が掟を破れば、彼を除くべきである。社会の掟に従わなければ平和は維持できない。
- 社会も、様々な構成要素がバランスよく釣り合っている状態が理想である。
- 理性と言語が人間がポリスをつくる理由である。

なぜ現代において、いやむしろ、古代ギリシア以降の各時代においてプラトンより、アリストテレスの思想のほうが重要視されたのだろうか。もちろん古代ギリシア思想をひとくくりとして見た時、当然アリストテレスがその周囲性であるとみることができるのも一つの大きな要因であろう。しかし、当然古代ギリシア以降の思想家はプラトンや、あるいはその師であるソクラテスの思想についても触れる機会を有したわけであり、最後の人だからアリストテレスを重視したという簡単な話ではない。そこにはアリストテレスとプラトンの大きな違いがあったと考えられる。プラトンが物事を理念的な知によって解釈する姿勢だったのに対し、アリストテレスの倫理学は、もっと現実的な実践的、常識的な側面を有していたからこそ重要なものとして認識されたのであろう。アリストテレスは知識の集大成として禪を得るわけではなく、経験や、習慣の連続によって善は完成されるのであるという非常に「合理的」な側面を当時において有していたからこそそこに以後の思想家は学ぶべき点を感じ、発展的に解釈を重ねていったのであろう。

## 2-2 中世～キリスト教とスコラ学～

次に中世の思想を見ていくわけだが、当時は哲学的な思想において革新的な発展は起こらなかった。それはなぜか。その答えは、キリスト教の絶対性にあるといえる。当時において、教会の権力は強大であり、思想においてもキリスト教を絶対としている以上、飛躍した、斬新な思想など生まれようもなかったのである。では当時においてギリシア古代思想は、その影響力を有していなかったのかということそうではない。それを証明するのがスコラ学が存在である。ここにアリストテレス哲学との密接な関係を見て取ることができる。以下にスコラ学の変遷をまとめてみた。

### <スコラ学の変遷>

初期（11世紀～） アリストテレスの翻訳版「旧論理学」普及 様々な学派が生まれる

中期（13世紀中ごろ～） アリストテレスをキリスト教神学の中に組み込む。 神学 > 哲学

後期（ ） 哲学的真理と神学的真理の並立。 哲学と神学の分離。

近世への移行期 人文主義の台頭と哲学領域への進展

この中期の部分が今回の研究においては非常に重要である。なんとあの絶対性をもつキリスト教ですら、スコラ神学へと形を変えてはいるものの、アリストテレス哲学の影響を受けているのである。これは事実として、古代ギリシア哲学の、その後の時代への影響を見て取れる部分であり、非常に興味深いものがある。そしてこのスコラ学は図らずも、次の近代への古代ギリシア思想の影響の橋渡しとなっている。それは2-3で触れていこう。

## 2-3 近代～ホッブズ、ロック、ルソーにみる古代ギリシア思想～

ホッブズ、ロック、ルソーの三人を近代思想家の代表としてピックアップした理由はまず、彼らの思想が、古代ギリシア思想の影響を強く受けていると感じられるからだ。彼らはそれぞれの思想の中においてプラトン、アリストテレスを賞賛したり、時には批判することで、その思想の説得力を高めている節がある。また、彼らの思想が現代においてもいまなお受け継がれる民主主義的な思想の出発点となったことから、彼らは今回の研究において外すことのできない三人であるといえる。

それではホッブズからみていこう。彼ら三人もプラトン、アリストテレス同様にキーワードを挙げてみていく。

『自然状態、自然権、自然法』

人間は基本的に平等。他者を従属させるほどの生物学的差はないから。

『社会契約説』

『自己保存の法則（生きるためになにをしてもいい→万人の万人に対する闘争）』

差のない人間がそれぞれの利を拡大するために互いの競い合うこと。

『譲渡』

それぞれの自然権を守るために政治を行う絶対的な存在（リヴァイアサン）権限を譲渡すること。≠『信託』

彼の古代ギリシア思想への接し方は、徹底した批判であった。イギリスに生まれ、オックスフォード大学で学んだ彼はその過程において、スコラ学を、嫌々ながらに、学んだ。彼はそのスコラ学の裏にアリストテレスが隠れていることも認識しており、アリストテレス批判と同時に、キリスト教をも批判し、独自のキリスト教思想をその著書『リヴァイアサン』において展開した。

また、彼がどういった部分においてアリストテレスを批判したのかについてまとめた。

自然本性によって人間のうちのあるものは価値のある、支配する者、ほかの者は仕える者とされており、いわば主人と奴隷とは人々の合意によってではなく適性によって、言いかえれば自然本性上の明知と無知によって、区別されているようなものである。アリストテレス『政治学』より→批判…万人は本質上互いに平等だから。

統治には二つの種類があり、そのうちの一つは命令権者の、もう一つは臣民の利益に向けられている。アリストテレス『政治学』より→批判…統治から生じる利益、不利益は命令権者のそれも臣民のそれも、すべて同一かつ共通だから。

彼は「人間」という点においてアリストテレスと決定的に思想を異にしていることが分かる。しかしながら、彼の生きた時代が、世界史的にも激動の時代だったこともあり、アリストテレスよりももっと現実的に物事を考えるようになったとて、なんら不思議はない。彼があえてその背後にあるキリスト教までも批判し、無神論者のレッテルを貼られてまでもアリストテレスに触れなければならなかった理由は当時において、その影響が決して無視できるものではなかったという何よりの証拠である。だからこそ彼は批判という体裁をとり、その当時に色濃く影響を残していたアリストテレスに対する持論の優位性を証明しようとしたのである。

次にロックの思想を見ていこう。

#### 『労働価値』

労働による所得は守られなければならない。⇨『私有財産』

#### 『分権』

権力を分散してその濫用を抑えるため。

#### 『革命権』

ホッブズのように権限を『譲渡』してしまうのではなく、『信託』という形をとり、革命の余地を残した。

彼はホッブズが確立した社会契約説的思想を、しっかりと体系づけ、確立したところにその業績があるといえる。彼がその著書においてプラトン、アリストテレスについて言及している部分についてまとめてみた。

—『市民政府論』 p104

「自然状態は不便であり、人々は社会を愛し、これを欲するので、彼らの幾人かが一緒に集るや否や、もし共同生活を続けたいと思うなら必ず結合して団体をなしたのである。」⇨アリストテレス

—『教育に関する考察』 p304

「ギリシヤ人の中に、われわれが現在この国で持っているあらゆる学問の、いわば根源とも言うべきものと、基礎が見出されるはずですから。わたくしはそうだということを認めますし、ギリシヤ語を知らないで学者として通用しないということも付け加えたいと思います。」

⇒プラトンやアリストテレスの名前は出てこないが、他のソフィストの名前がいっぱい。

—『人間知性論（三）』 p290

一『人間知性論（四）』 p216

真知に関する考察

p269

「私は、アリストテレスを古代の人々の間でもっとも偉大な人の一人とみなす。その広大な視野、思惟の明確と透徹、判断の力強さ、これに匹敵する者はこれまでまずなかった。……が、私は、アリストテレスをすこしも小さくせずに次のように真に言えると、すなわち、真知を手に入れるため、進んで真理を見いだそうとし、自分の理知を自分にできるだけもっともよく使おうと望む者を真理へ導くために、三段論法の形式は推理の唯一の道でないし、最善の道でもない、そう真に言えると考える。」

⇒演繹推理の伝統的理論体系であるアリストテレス・スコラの形式論理学も、三段論法についてはその形式性と不毛性を手きびしく批判するが、無視はせず、かれ自身の考想の中へ取り入れる。

訳者注 p401

ロックがプラトンに好意を寄せている文章を稀である。

以上、ロックの思想を見てきた中で、見て取れる古代ギリシアとの関わりあいは、それらのある部分において批判するが、無視はせず、かれ自身の考想の中へ取り入れようとしているということだ。彼はプラトン、アリストテレスがそうしたように、支配、被支配の構造を明確にしていって。もちろんそれは民主的なものではあるが、それはアリストテレスを批判したからこそ出てきた民主的な姿勢であるといえる。また、ロックは非常に合理性を重視した思想を展開していることもいえる。『分権』や『私有財産』などはその最たる例であるといえるだろう。

最後にルソーである。彼はプラトンが好きで愛読&精通していたといわれている。立法者に関する記述に強い影響を見ることができる。

『人民主権』

主権は譲渡できない、分割できない。

『一般意志』（全体意思ではない）

個々人の利害の総意を目指すのではなく、共通の利益の実現を目指す。

『所有権の保証』

『社会契約説』

ホッブズが生み出し、ロックが体系化した社会契約説をルソーが完成させた。

彼はイギリスで活躍したホッブズやロックとは違い、フランスでその思想を展開したが、本質的には彼らの系譜をたどってきたと考えていいだろう。彼が事実上完成させた社会毛や苦節が世界中に影響を与え、今日多くの先進国が民主主義的政治制度を有しているといっても過言ではない。

以下はプラトン、アリストテレスはもちろん、ホッブズ、ロックに関する部分の抜粋である。



## <社会契約論>

p 2 2

人類が100人ばかりの人に従属していると考えているようである。ホッブズも同じ考えだった。

p 2 2

アリストテレスはこれらの誰よりも速い時期に、人間の本性はまったく平等ではなく、奴隷として生まれる者と、支配するものとして生まれる者がいると主張したのだった。アリストテレスの議論が間違っていた訳ではない。原因と結果を取り違えたのだ。

p 8 7

叡智をもつものは、人間のすべての情念を熟知していながら、いかなる情念にも動かされない者でなければいけない。自分の幸福は国民の幸福とはかかわりがないのに、国民の幸福のために喜んで尽力しなければいけない。

p 9 1

賢者たちが大衆に向かって、大衆の言葉ではなく、賢者の言葉で語ろうとしても、大衆は耳を傾けないだろう。

p 1 5 4

しかしプラトンが指摘するように、生まれつき統治の才能がある国王というのはきわめて稀である、だから、自然と偶然が協力して、こうした人物を国王につけるということは、そうたびたびあるものではない。

p 2 0 1

政府を設立する行為は、決して契約ではなく、一つの法であること。執行権を委ねられた人々は、決して人民の主人ではなく、その公僕であること。

p 2 8 8

プラトンは「政治家」で今度は権利問題として、政治家は「馬の群や牛の群を飼育するものに似ている」と指摘し、政治家のありうり姿を調べるのである

p 3 4 7

プラトン批判

p 3 7 6

プラトンは統治についての著作において、自分の求める政治家と王を定義するために、権利についての議論を展開しているが、フィロンが報告するところでは、カリグラ帝は世界の主人が他の人間よりも優れた本性をそなえていることを、事実として証明するためにこの議論を利用した。しかし偉大な統治者が世に稀であるのが正しいのだとしたら、偉大な立法者とはいったいどのような存在なのだろうか。というのも、偉大な統治者は、偉大な立法者が提案した手本にしたがうだけでよいのだ。

p 5 1 6

立法は極めて困難な仕事なのである。プラトンもマキャベリも、立法者のしごとは神のようなものがなすべきことであると語っていたが、ルソーも同じように「人間に法を与えるのは、神々でなければいけないだろう」と語るほどである。しかし？

## <不平等論（人間不平等起源論の新訳版）>

p 2 1 3

「自分を知るということは、国旗節制することであるということについては、われわれの議論は一致していたはずだが、それなら、われわれが自分自身を知らず、思慮の健全さを欠いているとしたら、われわれ自身に付属するものの

善悪可否を、はたしてわれわれは知ることができるのだろうか、してみると、自分自身も、自分のものも、自分のものの付属品も、みなすべてこれをしっかりと見極めるのは、ただひとつの技術でできることのように思われる」つまり、ルソーは、プラトンに倣って、政治に関する学と人間に関する学とは、結局同一の方法によって究められることを、この作品冒頭において宣言している。

p 2 1 4

このイメージはプラトンに由来する。「人々はグラウコスを見ても、彼の元のほんとうの姿を見分けることは、もはや容易ではないだろう。その身は、元からある部分が疲労のために、ちぎりとられたり、すりつぶされたり、見る影もなく損なわれてしまっているから、本来そうであったような姿と比べるならば、むしろどんな動物にでも似ているおゆになってしまっているのだ」正義の問題が魂の三区分別との関連において扱われている部分からのものである。

p 2 2 3

ここでもプラトンのイデア論を念頭に置くことが、以下のテキストを理解する上で不可欠であることを認識させられる。

p 2 2 6

プラトンを愛読し、プラトンの考え方に精通していたルソーが「いつ権利が暴力に取って代わり、自然が法に服することになったのか」を利用する方法を思い出したということは、きわめてありえるべきこと。

p 2 4 1

プラトンの「国家」のなかで展開されている「線分の比喩」がある

p 3 4 1

ルソーにとって、人間の魂の本来的な在り方、すなわち魂の自然の状態をどのように考えているのかということが、自然法という学問の基盤をなすと考えられている。プラトンとルソーを比べてみると、ルソーにおける自然保とは、「理性に先立つ2つの原理」が「確実にして不変な」行動原理として、人間の魂を導き、支配すること、すなわち魂を「自然本来のありかた」に保つことにあるのだ、ということが理解されるであろう。彼にとって自然の条理とはプラトンにおけると同様、それ自体として自立した観念であり、自然の法をも含めて、あらゆる法の観念に先立って存在するものであったといえるだろう。

ルソーにとって古代ギリシア思想とは何だったのであろうか。直接的なことを言えば、統治体系の部分において、彼はプラトンの哲人王的思想と非常に似通った思想を展開している。しかしホッブズ、ロック、ルソーとみていくうえで気づいたことは、彼らとプラトン、アリストテレスがどのように似ているかということにはさして重要ではない。解釈次第でその共通点は変化しうるからである。重要なのは彼らが確かに、プラトン、アリストテレスを認識し、その思想を自分なりに解釈したうえで賞賛的、批判的に持論を展開していったというまぎれもない事実の存在である。ホッブズ、ロック、ルソーはなにもゼロからその思想を展開したわけではない。常に古代ギリシア思想家たちのそれと照らし合わせて発展させていったのである。

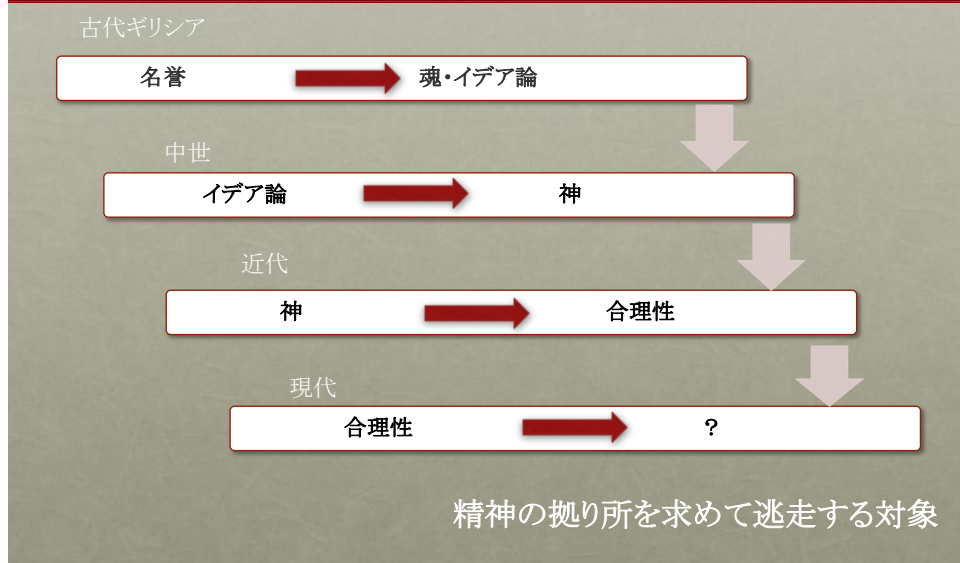
最後に、以下に古代ギリシア思想家とホッブズ、ロック、ルソーの思想をマトリックス化してまとめたものを挙げる。ここで重要なのはいま述べたとおり、共通点が多い少ないという話ではなく、その裏には必ず古代ギリシア思想家が存在しているということである。

	ソクラテス	プラトン	アリストレス	ホッブズ	ロック	ルソー	現代
最善の統治形態	—	君主制	政体を問わない	人民主権の結果、君主制	分権 (立法権が最上位)	人民主権 (一般意思) 共和国体制	民主主義
人間(国民)の本質	理性的である	不完全なものである	政治的動物である	利己的(自己保存の法則)	理性的社会的、勤労する者	不平等、自由、本能的な欲動	自由・平等・欲望
国家・個人の関係	個人主義	国家は個人よりも優先される	国家は個人の善追求のためのもの	契約関係	契約関係	契約関係	契約関係
現実or理想	理想	理想	現実	現実	現実	理想	現実
至上価値	善く生きること	アイデア	徳	自由と平等	所有権	自由	金 / 愛?
教育観	対話	一律教育	国制に合った教育	—	身分別	消極的教育の原理	普通教育

### 第三章 考察

#### 3-1 ヨーロッパ人は常に「逃走」する

# 閉塞感からの「～へ」の逃走



これまで古代ギリシア思想が各時代に与えてきた影響についてみてきたが、その過程において私はヨーロッパ人のある一つの性質を発見した。それが上図にも表される「逃走」である。これはなんらかの閉塞感を避けるために、なにかにすがってきたという意味での「逃走」である。古代ギリシア思想が強く影響を与えたタイミングにおいて、人々は心の拠り所の対象を変化させてきた。古代ギリシアにおいて、ソクラテス、プラトン、アリストテレスが生み出した魂・イデアという概念に、当時の閉塞感を打破するために人々ははすがようになっていったのである。世界にはイデアがあると人々は信じることで救われたのである。また、中世においては、アリストテレス哲学の影響を受けたキリスト教が、信じる対象としての絶対的地位を確立するにつれて、人々ははがる対象をイデア論からキリスト教、つまり「神」に変化させていった。それは絶対不変の逃走対象であるかに見える。しかしその後も逃走対象の変化は続く。その背景には、「神」では解決できない絶対的な現実があったからだ。圧政や、天災、それら事象が引き起こす市民への負担はどうあっても神にすがることのみでは解決しえないと万人が悟り始めたのだ。そのため、人々はその閉塞感を解決しうる「合理性」へと逃走の対象を変化させる。ここにおいても、前章のホッブズ、ロック、ルソーの部分で触れたように、古代ギリシア思想の影響を見ることができる。彼らはその「合理性」を生みだすための鍵を古代ギリシア思想に見出したのである。彼らの思想を批判し、発展させることで、人間の平等を初めてしっかりとした形で規定した社会契約説という「合理性」を生み出したのである。その後の近代から、現代にいたる長い歴史の中においてもその「合理性」の表すところを産業革命や、科学へと変化させながら現代まですがり続けてきた。

ではこの先の未来においてその逃走の対象はどのように移り変わっていくのだろうか。おそらくしばらくの間は「合理性」であり続けるだろう。しかしながら、現代においても当然耐えがたい閉塞感があり、それが「合理性」によって解決されてないということは純然たる事実だ。だからこそそう遠くない将来、「合理性」に代わる逃走対象が生まれるだろう。それは新しいなにかかもしれないし、あるいはいままでに出てきた「イデア」「神」なのかもしれない。

## 3-2 思想家は常に古代ギリシア思想家と「闘争」する

これは、前章のホッブズ、ロック、ルソーの部分から見受けられたことである。どの思想家も自分の思想をゼロから

生み出したわけではないということがまず言える。上記の部分において列挙したように、相当の部分において引用したり、プラトン、アリストテレスの名前を挙げ、彼らの思想を賞賛、批判したりして持論を発展させ、その正当性を高めている。ここから導かれることは彼らにとって古代ギリシア思想は単なる過去のものではなく、当時においても十分なヒントを有し、検証すべきものであったということだ。そういった考えのもと、彼らの思想と、自己の思想を比較、つまり、あたかも議論をして発展させていったのである。これは現代の思想家にも言えることで、リップマンなどはその著書『世論』において度々アリストテレスの名前を出している。つまり、時代が変わろうともヨーロッパの人々にとって古代ギリシア思想は常に見返すべきものであるということである。3-1において人間は心の拠り所となる対象を変えていると論じたが、思想家にとり、心の拠り所は常に古代ギリシア思想家なのではないだろうか。

### 3-3 現代ヨーロッパの諸問題を解決する糸口としての「逃走×闘争」

この節においては欧州危機が抱える問題にこれまでみてきたことで得たことから提言をしていきたい。3-1の部分で見てきたとおり、ヨーロッパ人の気質としてその時代の節目ごとに心の拠り所となるものを変化させてきた。そうすることにより彼らはその当時の苦境を脱してきたのだ。その拠り所は現在「合理性」であると考えられる。特に経済合理性だ。しかし、現実には欧州金融危機は起きている。これは諸外国との兼ね合いも大きいだろうが、その「合理性」の拠り所としての機能が果たせなくなってしまうと考えられる。つまりこの苦境を脱するために、経済的合理性を拠り所とする現在のスタイルからの脱却が必要なのである。私は新たな拠り所としてアリストテレスの「中庸」を挙げたい。現代までの拡大的経済活動ではありえなかったスタイルであるといえよう。何ごともやりすぎず、やらなさすぎず、そういった生活を目指すべきなのである。経済的な合理性の結果生み出されたものが果たして本当に幸せだったのだろうか。かならずしもそうとは言えないだろう。富を追い求めるあまり、心理的な充実を欠いてしまっているといえる。それどころか力を注いだはずの経済においても苦境に立たされてしまっているのである。その状況から逃れるために、ヨーロッパ人は経済第一主義を脱却し、心の充実を図ることを目指すべきなのである。

### 3-4 おわりに

私は今回の研究を古代ギリシア思想が各時代に与えた影響をみていくという趣旨もと進めていった。しかし、この「影響」という言葉だけではくくれない何かがそこにはあると感じた。なぜなら古代ギリシア思想というものは完全に過去のものになってしまったわけではなく、現在まで続く経済的合理性を生みだした源泉であると捉えることもできるし、思想家の満たすべき基準、越えるべき指標であると捉えることもできる。その位置づけは将来にわたっても変わることはないであろう。アリストテレスのこの思想のこの部分が現代にまで息づいているのだというわけではなく、古代ギリシアの思想家たちは思想という枠の中でずっと生きていたのだから。

## 謝辞

今回の論文を執筆するにあたり、ご協力いただいた上山信一教授、また、グループワークの延長として執筆をしたためその際にご協力いただいた木村尚美さん、米盛勇哉さん、高橋正幸さんにこの場を借りて感謝を述べさせていただきます。ありがとうございました。

## 参考文献

- よみがえる古代思想 「哲学と政治」講義 (1) 佐々木 毅 講談社 (2003/2/13)
- 国家〈上〉 (岩波文庫) プラトン、藤沢 令夫 (文庫 - 1979/4/16)
- 国家〈下〉 (岩波文庫 青 601-8) プラトン、藤沢 令夫 (文庫 - 1979/6/18)
- 『近代を支える思想』植村邦彦 ナカニシヤ出版
- 「リヴァイアサン」トマス・ホッブズ 岩波文庫
- 市民論 / トマス・ホッブズ著 ; 本田裕志訳 京都 : 京都大学学術出版会, 2008. 10
- 政治学 (中公クラシックス) アリストテレス、北嶋 美雪、松居 正俊、尼ヶ崎 徳一 (新書 - 2009/11/11)
- ソクラテスの弁明・クリトン (岩波文庫) プラトン、久保 勉 (文庫 - 1964)
- 市民政府論 (光文社古典新訳文庫) ジョン ロック、John Locke、角田 安正 (文庫 - 2011/8/10)
- 教育に関する考察 (岩波文庫 白 7-5) ロック、服部 知文 (文庫 - 1967/11/16)
- 人間知性論 1 (岩波文庫 白 7-1) ジョン・ロック、大槻 春彦 (文庫 - 1972/10/16)
- 人間知性論 2 (岩波文庫 白 7-2) ジョン・ロック、大槻 春彦 (文庫 - 1974/5/16)
- 人間知性論 3 (岩波文庫 白 7-3) ジョン・ロック、大槻 春彦 (文庫 - 1976/9/16)
- 人間知性論 4 (岩波文庫 白 7-4) ジョン・ロック、大槻 春彦 (文庫 - 1977/8/16)
- 社会契約論 (岩波文庫) J. J. ルソー、桑原 武夫、前川 貞次郎 (文庫 - 1954/12/25)
- 不平等論—その起源と根拠 ジャン=ジャック ルソー、Jean - Jacques Rousseau、戸部 松実 (単行本 - 2001/11)
- 人間不平等起原論 (岩波文庫) J. J. ルソー、Jean Jacques Rousseau、本田 喜代治、平岡 昇 (文庫 - 1972/1)